

地区内道路の交通不安に関する一考察

近畿大学理工学部 正員 ○高 石 博之
近畿大学理工学部 正員 三 星 昭 宏

1. はじめに

車の増加に伴う道路の整備、特に地区内道路の整備はまだ十分でないのが実情である。この研究は、住民の交通不安意識の構造を探り、どのような条件が交通不安意識に影響を持つかを見出そうとするものである。

2. データについて

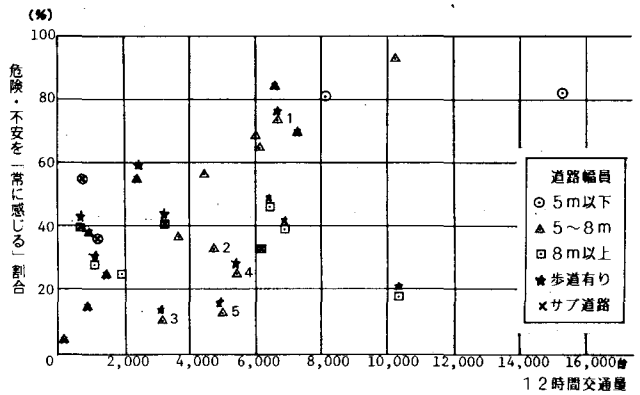
昭和58年12月に大阪府下の地区内道路沿道に居住する住民を対象に、交通不安に関する世帯別アンケート調査を行なった。調査地区は、長瀬地区(東大阪市)、永和地区(東大阪市)、八尾地区(八尾市)

法善寺地区(原市)、千代田地区(河内長野市)の5地区である。調査対象道路の12時間交通量は、

3,500~6,300台/12h、道路幅員7m前後、永和地区を除き歩道を有し、歩道幅は約1.5mである。各地区の調査路線長は500~2,000mである。アンケートは主に主婦層に解答してもらい、回収率は平均71.4%で計410票の解答を得た。

3. 交通不安に対する住民意識

自宅前の路上で自動車による危険不安を感じる割合は、「常を感じる」が41.4%「ときどき感じる」が37.3%とほとんどの人が不安・危険を感じている。地区ごとにみると、不安・危険の感じ方に違いがみられる。この違いを見るため、横軸に交通量、縦軸に危険・不安を「常を感じる」割合をとったものが図-1である。図-1は昭和48年に行なわれた「交通と沿道環境に関する調査」のデータに今回のデータを加えたものである。道路型態別にそれぞれ異なる傾きの正の相関が見られ、今回の5地区においても同様である。このことより交通量が不安・危険の感じ方に影響している



(注) 1、長瀬地区 2、永和地区 3、八尾地区 4、法善寺地区 5、千代田地区

図-1 自動車による危険・不安を「常を感じる」割合と交通量の関係

表-1 記入者別自動車による不安・危険度のうちわけ

	常を感じる	多少感じる	特に感じない
世帯主	15 (31.9)	22 (46.8)	10 (21.3)
主婦	86 (46.2)	67 (36.0)	33 (17.0)
学生	3 (14.3)	10 (47.6)	8 (38.1)
老人	9 (56.3)	4 (25.0)	3 (20.0)

表-2 自動車保有別自動車による不安・危険度のうちわけ

	常を感じる	多少感じる	特に感じない
自動車(有)	107 (39.1)	108 (39.4)	57 (21.5)
自動車(無)	54 (45.8)	39 (33.1)	25 (21.2)

4. 数量化理論Ⅲ類による分析

事故経験の有無、子供の遊び場という意識以外の要因を見ると、事故経験有無では、「ある」は「ない」に比べ交通環境に対する注意度が高いためか、道路への認識度が高い。子供の遊び場では、道路上への認識度は、「道路上」、「自宅内」、「公園」、「空地」の順になっている。これらのことから、図中破線で示されるような3つのグループに分けられる。

5. まとめ

参考文献

2) 生活ゾーン規制研究会、「生活ゾーン規制に関する基礎的研究」；昭和54年3月～昭和56年3月

3) その他関連論文

